

平城京の土器

下ツ道は、7世紀の中ごろに整備された、奈良盆地を南北に縦断し平城京と藤原京を結ぶ古代の幹線道路です。平城京の大極殿はこの道の真上に建てられました。道の両脇で雨水などを受けていた側溝のうち西側の溝は、朱雀門の造営時に埋め立てられ、破壊されていました。

この溝からは、多数の土器が出土しました。あわせて、同じ溝からは木簡も出土しています。とりわけ、「過所符」とみられる木簡は注目できます。過所符とは、関所を通る際に役人に見せる通行手形のようなものです。

ここで大切なことは、土地を表す「郡」という字です。「郡」は701年に完成した古代の法律、大宝律令で定められた書き方であり、それまでは「評」と書かれていました。また、715年には、過所符に諸国の印を押すように規定され、紙でなければならなくなります。

つまり、この木簡において「評」ではなく「郡」と書かれていること、紙でなく木簡が用いられていることを総合すると、木簡の年代は、701年から715年の間と推定することができます。したがって、この木簡と共に出土した土器群も、およそこの年代の所産だと見積もることができます。